『当世妙々奇談』—翻刻と書誌—

山本和明

はじめに

弘化二年以降の成立と目される戯作に、何毛呉餡内なる人物の手になる『当世妙々奇談』上下二冊がある。その外題が示すように、おおむね妙々奇談モノの嚆矢とも言える周滑平『学者必読　妙々奇談』二冊（文政十二年）のスタイルを踏襲する。当時著名な文人・戯作者たちのもとへ、それぞれの道の先達（故人）が訪れ、その俗物ぶりや未熟さを揶揄するというそのスタイルは、化政期の世相を反映したものと理解され（中野三敏『江戸名物評判記案内』一九八五年）、多くの追随作を生んだ。本書もそうした追随作の一つに数えられるものである。この『当世妙々奇談』の内容だが、「水滸を評して羅貫中馬琴を罵しる」「俳諧を論じて桃青翁鳳朗を懲らす」「董太史塩河岸に盛儀を訪ふ」（以上、巻之上）、「谷文晁八丁堀に武清に遇ふ」「難語之考濱臣守部を嘲ける」「先哲之話原念齋琴臺を説く」「地獄之奇談」（以上、巻之下）の七話より成っている。馬琴や橘守部、東条琴台といった当代の戯作者・俳諧師・文人などを、先人たちに理屈っぽく罵倒させていて痛快ですらある。その内容からは、文人・戯作者周辺を取り巻く当時の状況が伺われて興味深い。紙面の都合により本稿では、架蔵本より『当世妙々奇談』の翻刻を収載する。本書をめぐっての私見（私感）は別途、稿を改めることにしたい（相愛国文第十三号掲載予定）。

『当世妙々奇談』書誌

以下、底本とした、架蔵本の書誌を略記しておく。

○体裁　　中本　上下二冊　縦十八・二糎×横十二・〇糎　楮紙

○表紙　浅葱色無地

○題簽　原題簽。左肩子持ち枠（十二・八糎×二・九糎）に「才子／必読　当世妙々奇談　上（下）」

○内題・署名　「才子／必読　弘化奇話初篇巻之上（下）　何毛呉餡内著」

○匡郭　単郭（十四・三糎×九・八糎）　但し自叙は匡郭無。

○紙数　上巻　自叙二丁・本文二十三丁（計墨付二十五丁）

下巻　本文二十一丁　（計墨付二十一丁）

○挿絵　最終話を除き一図ずつあり。全六図。

○内容　巻之上「水滸を評して羅貫中馬琴を罵しる」「俳諧を論じて桃青翁鳳朗を懲らす」「董太史塩河岸に盛儀を訪ふ」の三話、巻之下「谷文晁八丁堀に武清に遇ふ」「難語之考濱臣守部を嘲ける」「先哲之話原念齋琴臺を説く」「地獄之奇談」の四話、合計七話よりなる。

○尾題　「才子／必読　弘化奇話初篇巻之上（下）終」

○刊記　ナシ。但し「地獄之奇談」冒頭に「弘化二年のことなりし」とあることから、それ以降の成立と推定される。

○備考　上巻序文頭に 亀半 と印有。上巻裏表紙見返しめくり部に 河茂 と仕入印有。

『国書総目録』等に従えば、国会・京大・京大潁原・京大谷村・慶応幸田・松宇・東京都立諸家・大阪女子大（初編上存）・栃木黒崎などの図書館に所蔵が確認される。そのうち二点を披見したが、外題および内題に若干の相違をみることができた。

◇京都大学文学部図書館潁原文庫蔵本（請求番号　国文学潁原文庫pl64）

○帙題　「才子必読妙々奇談　乾坤二冊」

○所蔵者認定書名（図書カードによる）「才子必読当世奇話」

○体裁　中本　乾坤二冊　縦十八・二糎×横十二・一糎　混漉紙

○表紙　薄香色地渋引

○題簽　左肩黄色地単辺「才子／必読　妙々奇談　乾（坤）」
○内題・署名　「才子／必読　当世奇話初篇巻之上（下）　何毛呉餡内著」
○尾題　「才子／必読　当世奇話初篇巻之上（下）終」
○備考　そのほか匡郭・紙数・挿絵・内容・刊記の有無は架蔵本に同じ。

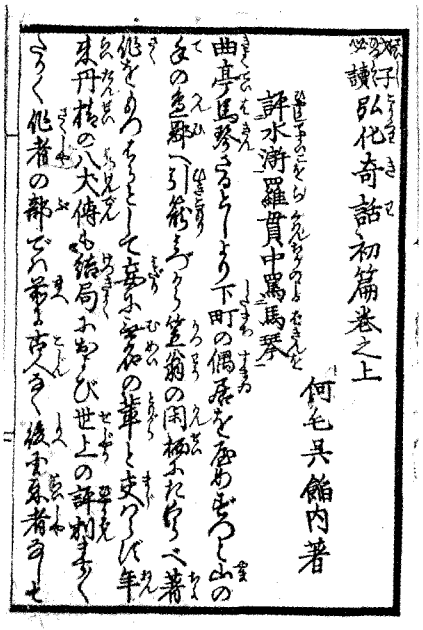
◇京都大学文学部図書館蔵本（請求番号　国文学pl50）
○所蔵者認定書名（図書カードによる）「妙々奇談」
○体裁　中本　一冊（乾のみ存）　縦十七・九糎×横十二・〇糎　楮紙
○表紙　浅葱色地格子縞文様
○題簽　左肩黄色地単辺「才子／必読　妙々奇談　乾」
○内題・署名　「才子／必読　当世奇話初篇巻之上　何毛呉餡内著」
○尾題　「才子／必読　当世奇話初篇巻之上終」
○備考　そのほか匡郭・紙数・挿絵・内容は架蔵本に同じ。

底本に比して異なる点は、大きく言って二点にまとめられる。一つは、内題・尾題の「弘化奇話」と「当世奇話」の違い。もう一つは題簽に記された書名が「才子／必読　当世妙々奇談　上（下）」と「才子／必読　妙々奇談　乾（坤）」と言うように異なっている点である。このことは既に高木元氏も指摘される処だが（『江戸読本の研究』508頁）、版面からも「当世奇話」の「当世」の箇所で字体は異なるし、明らかに入木された痕跡をみることができる。よって披見した京大本の二点は「弘化」を「當世」とした改修後印本として良いのではないだろうか。なぜ「改修」されたのか、その意味するところは考える必要があるけれども。

ともあれ、『当世妙々奇談』には興味深い記載が多く、幕末期の出版を巡る問題をも考えさせる資料的側面をも持ち合わせていることを一言指摘した上で、以下、本文をご参照いただくことにしよう。

三

上巻表紙



上巻本文冒頭

【翻刻本文】

＊今般の翻刻に際して、基本的には原本の本文を出来るだけ残すよう心掛けた。但し各話冒頭の標題は書き下し文とした。

＊その使用文字に誤りも多く、漢字は適宜判断を下して通用の字体に改めた箇所もある。

＊ルビについて、敢えて統一をはかることをせず現状のままとした。

＊各丁表裏ごとに」印を付し、［」15ウ］の如く丁付けを示しておいた。

＊本文中、今日からみれば不穏当な表現もみられるが、研究資料的価値を鑑み、そのままとさせていただいたことを附記しておく。

《上巻》

自叙

呉館内倦睡隠几、有客称子墨客卿、来而閲几上之書、赫然而怒曰、古蒼頡造字、天雨粟、鬼夜哭、正為汝輩而哭也、夫文者貫道之器、経国大業、不朽盛事、豈為謗毀而設乎哉、［」

序01オ」此書所列、皆当世俊傑、藉不能褒揚、何忍為此、而毒口謗訕、毫無忌憚、蒼縄玷璧、跖犬吠堯、良有以也、豈非抜舌之業果哉、答曰、唯々否々、夫此書所列、実当世英傑、然君請看、彼輩読之、将為何態、其上者、輙然而哈、置毀誉於度外、「」序01ウ」其下者、方奮拳角口、怠憊怒争、不知其謗之愈大而其短之愈顕更為後編之案也、紂誅直諫、禹拝善言、由此観之、謗毀之加己、正它山之石而所以砥礪名行者也、不其然乎、時晨鐘一声、睡魔正去、座客不在、祇聞戸外啾々之「」序02オ」声、蓋鳳朗己死、恐其鬼哭、「」序02ウ」

才子必読　弘化奇話初篇巻之上

何毛呉餡内著

水滸を評して羅貫中馬琴を罵しる

曲亭馬琴さるとしより下町の偶居をやめずつと山の手の辺鄙へ引籠みづから笠翁の閑栖にたくらべ著作をもつはらとして妄に無名の輩と交はらず年来丹精の八犬伝も結局におよび世上の評判ます〳〵たかく作者の部では前に古人なく後に来者なしと「」01オ」いふは此翁のことなりとて刊行の書肆なまもの識の医者など大にをそれ服しける程に馬琴眼中人なきこゝろえなりしが或日玄関へ一人の客きたりて至極遠方より参りたる者なるが鳥渡面談いたしたき事あつてわざ〳〵御尋まうすなり此旨主人へ通達いたさるべしと権柄に案内を乞ものあり取次の者これはいつも書肆が戯作をたのみに来るとたがひいと〳〵横風なるものかなとおもひけるが其風躰甚あやしく「」01ウ」何分日本人とはおもはれず何れしさいのある事ならんとかくと主人に取次けるにまづこなたへ請じいれよと有ければやがて書斎へ伴ひ入ける此客すなはち昂然と上座にとをり儀太夫の三味線ひきか棹をおさへて天井板をにらみつめたやうにぐつとそりかへり咳ばらひ三ツ四ツしてさていふやう曲亭馬琴とは足下なるか吾儂は羅貫中と申漢人にて候が拙者水滸伝の事につき彼是御評を蒙り其中心得がたきことどもおほかり猶又「」02オ」貴著の八犬伝もまうさば水滸伝の翻訳にて別段にあたらしい妙案といふでもなく姓名をとりかへ人数をへらし唐山のはなしを日本の咄に仕たまでの事なるに奪胎換骨古今の出来だなどゝ高慢いたさるゝが片はらいたくぞんじ一二ヶ條御談申たくさてこそ参上いたせしなりとありければ馬琴心中大におどろき平生おのが八犬伝の自慢にて水滸伝は趣向に粗悪があるなどゝさま〳〵悪口せし覚もあれば背中「」02ウ」に冷汗をながし羅貫中と知たなら留守をつかうてとほすまじきものを

五

例の戯作をたのみに来りし者にやとおもひ作料の千疋にもなることかとの欲心よりとんだ迷惑な人にあひけるもの哉とおもひわづらひけるがもとよりぬからぬ老人なればこれは〳〵ようこそ遠方のところ御足労の御いとひもなく御尋下され下拙が身にとりまして面目この上なく忝次第にそんずるさて唯今おほせられましたる事ともは聊もつて承知仕ら［」03オ］ざるところなりかつ下拙半世の著述みな貴公様の糟粕を舐りあちこちとつぎたしをしてこれまでこしらへ来りましたるところなれば中々どをいたして水滸の一書を誹謗いたすの悪口をまうすのとの儀はけつして下拙に於てはないことでござるといひわけをすれば羅貫中から〳〵とうちわらひ足下は吾儂漢人なるをもつて日本の仮名本などは読しことはあるまいとの了簡にて左様な誣言をいはるれどたとひ正人君子の形状は出来ずともかりにも文［」03ウ］筆を弄して人に勧懲をさとすものがおのれが心を欺くとはあまり見さげた魂じやうなりわれかつて玄同放言や女水滸伝などよみしことありまたは八犬伝の端書などを読ておぼえがありしば〳〵水滸伝を誹謗せらる已に足下水滸伝に三等の趣向をつけ初は循史半は魔界終は忠臣といふ説をとなへ金聖歎が七十回をもつて全部とするの説を駁し公然と自放にしてたとへ羅貫中

をして今にあらしむるとも必わが言にしたがはんなと書たる［」04オ］覚があるべしなる程足下の如き無学の俗了簡にては三等の趣向なども出来そうなことなれば無理とはおもはざれどもそれはそれで手前ひとりの説にして朋友門人などへ話にするならよけれども判布の随筆などへ書ちらしあまつさへ千古未発かの所謂作者の隠微を見出したとの高慢は何ともこゝろえぬことなり彼聖歎が七十回をもつて大団円とするは至極もつともの説にて千載の下吾儂知己ともいふべき言なるに足下これにふくせす若七十回をもつ［」04ウ］て全部とせば末一等を捨るなりしかれば作者の本意にあらずとて無理に宋江が方臘をうつの事を付たがる近松門左衛門とやらが作りたる浄瑠璃本の誹判するとはちがひ吾儂深意あつて編述したる水滸伝を中々足下の眼力をもつて是非をいはんなどゝは押がつよい今こゝろみに聖歎がわがこゝろを得たるところを論ぜんに玉麒麟蘆俊儀を水泊の英雄こんまうして遂に呉用が謀をもつ欺よびよせたるをこれ孔子の春秋の書法にならひ麟を獲［」05オ］て筆を絶なりといふところ一言して作者のいんびをひらきたりいはんや天下道なければ褒貶の権江湖にありといふ最初の論にひきつゞいて見ればなほさらなり一部の小説をとつて遂に麟経に比したるは聖歎が抜群の

気量にて吾儂知己といふべきものはこゝをもつてなり足下が三等の趣向などはこれ日本人の俗見なり芝居の作者の狂言をかくやうにそれではあとのだんがないのなんのといふ言はこの方のはたけにないことなりいかにも吾儂萬巻の書を［｜05ウ］よんで安邦定国の大略を胸に蔵むといへども昔時宋の政　みだれ小人姦邪は朝にみち正人忠直は野にかくれて有志のもの擯斥せられいかんともすべきやうなく史筆またときにへつらひて後世を欺くことの多きにより満肚裏の不平を水滸の豪傑にたくして発泄したるものなりされば筆法夫子をまなび竊に当時の君臣を美刺して知己を千載に俟ところなり一字の褒貶なしといへども微意を寓するところ深妙なり豈足下の輩のよく萬一をうかごうところなら［｜06オ］〔図版①〕［｜06ウ］07オ］んや足下また常にいふ西遊記は人たりす水滸伝は人おほしともに其中を得ずとしかれば自作の八犬伝をもつて両書の上に出るとの了簡であらんが西遊記は道家の洒落にて老子の微意を寓せしものなれば尋常の凡眼をもつて読得べきにあらず悟空悟浄八戒の三人を一部のたてものにして三天の使宿に配するなど奇妙に工夫の出来たるものにて是又足下輩の眼力のとゞかぬところなり水滸の一百零八を人数おほしとのゝしるは上天星宿の配意をしらざるゆゑ［｜07ウ］なりすべて小説をよむにたゞ俗語をおぼえたばかりでは大意がわからぬものじやいづれも深意あつて

図版①

七

なせしことにて足下の八犬伝のやうにもと俗間の軍書本にある里見の八犬士だの大内の十杉士だのといふよりおもひ付たる人数でなければ不審におもふもつともなりよくまづかんがへて見よいゝきになつてゐる八犬伝もあまり出来た趣向でもあるまい大諸侯の女が手飼の犬と配合の一條より事おこるなどあまり非類のとりあはせにて田舎料理にもきいたことがないたとへ「」08オ」犬に其身は汚されずとも冨山の山中にて犬に食ものをもらつて居たことなれば養るゝ恩はあるべしまして経水とゞこほり懐恰して見れば手もなく犬の子なり足下先年燕石雑志を著せしとき狐は美人に化れども人と交合することはなしとて楽天の詩を引て論じられたるおほえがあるべしいかに作りものがたりなればとて犬の胤が英雄と出現し我水滸の趣に比するなどはなさけなきことなり人道滅却のものかたりが偶愚俗の目に叶ばとてなに程の手柄かあるいらぬことながら序「」08ウ」なれば申べし足下燕石雑志を著せしとき北静廬翁に誹評せられたるが返答の出来るところばかりを烹雑の記へかきいれ上欄へ静廬翁の名をかきくわへて其餘庇にて彼本もうれたるよしこれらのこともあるまじき所業なり此外京伝と絶交して今の京山などへは存外の無沙汰をしながらせん年書画会をなす

八

とて配りものを持参して京山を訪たる始末など市井の匹夫もなさゞるところなり足下また名詮自性といふことを好んでよく「」09オ」かきたがるが足下のなすところ仁義をはづれ犬も同様なれば犬がすきで犬の伝をこしらへたるも其性の犬に類すればならんこれまた名詮自性にちかしと散々に悪口すれども馬琴一言の返答なくあやまり入て居たりけり

俳諧を論じて桃青翁鳳朗を懲らす

昔年大坂の町人花屋某の後園にて世をさりたる桃青居士江州粟津の木曾寺に霊をたくして居たりけるがちかごろ遠忌にあたればとておもひがけなく去縉紳家「」09ウ」より花の下大明神とあがめまつるべきよし御さしづありけるにぞ桃青居士眉をしわめさて〳〵怪からぬこともあるものかなわれ生前なんの功徳あつてかくのごとき贈号にあづかるにや古池に蛙ぐらいの発句を千萬言つらねたればとて更に世教に裨益あるともおぼえずことさら我生前風流のこゝろえたがいよりあらぬ乞食のまねをして大切な主人の禄をすて世界をまごつきあるきしこと死後甚めんひなくそんじいまでも藩中に発句俳諧などするものあれば「」10オ」また我まねをして人の家で死やうなめにあはねばよいとかけなからなげかはし

く思ふほどのことにて実に俳諧ほど世上につまらぬものはなけれど別て我死後百年の末五十年来このかたの俳諧師ほどつまらぬものはない我存生の頃は世の中いまたひらけきらぬゆゑ学問するにも当時のやうなことではないほねの折れたことで今時の百倍力を入れてもせんさくのゆきとゞかぬ事だらけで誤りがおほく此節にいたつて具眼の人に批評せらるゝと一言も［」10ウ］ないこと沢山なれど其非を我党のものから正して古ひ誤りを補ひてくれやうとはせずそのひがことを見わくる眼がないからとんだ誤りを規則と心えなんでもおれがしおいたことは烏が鷺でも理を非にまげて助るゆゑ贔屓の引たふしにて文盲中間の親玉のやうにこゝろある人にそしりわらはするこそつらきことなれしかるに我ながれをくむやぼ俳諧師どもこのこゝろをもわきまへず我此度の贈号などを鼻にかけ祖翁の徳はゑらひものだなぞとのゝ［」11オ］しりしか誇る族もありたとひ俳諧が風流のみちにもせよ稲荷どうやうに位をうけるをよろこぶべきすぢあるべきか贈号の御沙汰ありとても我にかはりて再三再四御辞退申上べきこそ本望なるに神は非礼をうけずといふに気のつかぬこそ愚なるくたびれものなりまして花の下宗匠といふ号をもらひしとてよろこび誇る鳳朗とも云白痴いつぞや遠忌のせつ駕籠にのつて廟前へ来りしことあり此ものいまは江戸に偶居すときけりまづこの者をこらして諸国の俳諧師どもへ伝へ［」11ウ］かたらせんとてきうにおもひ起し例の菅笠頭陀袋行脚の躰にて早速に江戸表へ着し其日すぐに鳳朗か宅を訪んとおもひしがいや〳〵あさつてはわが忌日にあたれば定めてかれが宅へ大勢かのともがより集りて居ことならんまづ今明日はそこらこゝらを見物せんとて所々俳諧師の家など立よりてみれどもいづれも咄せさうなのは一人もなくくろ板塀にみがき竹のしのびがへし見越の松が一本ありなどしてとかく囲ものかなにかの風俗に似たれば元禄ころの様子と［」12オ］かわりはてたる俳諧師の躰に桃青大に感傷しなみだをこぼして此みちのおとろへたるをなげきけるほどなく其日にもなりければ桃青の霊飯ぐらの自然堂鳳朗が宅へいたり見るに案のごとく文盲でやい大勢より集りてけふは芭蕉忌なりとてつまらぬ歌仙など仕て居たり座鋪の床の間には自身の木像をすゑおきたりしかばこれ幸のことなりとてかの木像へ霊を托ししばらく様子をうかゞひゐたりかくて歌仙もはてたりしかばあとは酒もりとなりおの〳〵十分に気げんと［」12ウ］なりけるが主人鳳朗は今日の受納の多寡をあんじ居たりあの包は百疋この目録は酒代とばかりあるが二朱やう銀玉やうあぶなきもの

九

図版②

なりなどさまゞこゝろを労したるが忽ち床の間の木像声をはつし受納物を左ほどあんじることなかれ酒の代くらゐは

十分ならんといひければ鳳朗大におどろきしがこれは平生わが俳諧のみちに志しふかく已に花の下の大宗匠とまでなりしことなれば祖翁も年ごろ感心あつてけふはからずも言葉をかけ給ふなるべし［」13オ］〔図版②〕［」13ウ」14オ］と慢心を生じイヤこれは恥入たる御言葉なりしかし年々かやうに同友うちより一杯の酒のみかはし御忌をとひまするもみな尊公様の御徳をしたひ風流のみちに心を委候へばなりといふに木像あざ笑つてよく風流々々と口まめにいふことだが風流とはいかなるものと心得たるやらんわからぬ風躰をして坊主かそうかみになり豪富の町人ともへとり入幇間などゝは段がちがふと口ではいへど内心はやつぱり幇間にて酒食をむさぼりくらふを風流とはいは［」14ウ］れまじいはんやわがために忌日をとふとて咄家か浄瑠璃のよせのごとく一人まいいくらか銭をあつめあくまで受納にこゝろをくばりなどして何の風流とこゝろえたるや風儀のわるきことけいあんなどよりも甚しわれら黄泉の下にあつてことの外なげかはしくぞんずるところなり一躰俳諧といふは史記に俳諧はなを滑稽のごとしとあつてすこしおかしき風をおびさればならぬものなり其方などかゝる子細もそんぜず俗談平話わかりさへすればそれが俳諧なりといつ［」15オ］て少しも滑稽のみちをしら

ずまじめの言を十七言にならふるばかり附合といへどもたわ言をくりかへし〳〵いひつゞくる斗り真を学びて真を得んとするもの一人もなく俳諧とも連哥ともなにとも名のつくべきやうなき一種寝言のごときものなりされば仮名づかひてふをはなどいふことは一切のけものにしてふりかへりもせずたとへは葵の仮名「あふひなるを「あをえにても「おうひにても「をほひにても「おふいにても口にとなへて其ものとしれさへすればよしとおもふ言語同断のことどもなり［」15ウ］これらのことは姑をき後日ゆるりといひきかすへしさて昨年吾百五十回の遠忌にあはんとてわざ〳〵木曾寺へ来りしは大悦なれども花の下宗匠の号をもらひしは何事ぞそれ俳諧をまなふ者猶禅をならふがごとし樹下一宿の境界をしたひ浮世の塵をよそに見て其道の工夫三昧にならざれば出来ぬことなり苟も名聞に心あつてなんそや俳諧の宗匠といはん其方貴人の御高庇をたのみ例の文盲の金もちをおどさんとて花の下宗匠などゝ名前をもらひしこそあさましけれそれを鼻にかけたがる［」16オ］其方の社中ともゝよく〳〵ばかなやつばかりあると見へるまた花の下大明神の贈号も其方どもまことの人間ならいか様にも申のべて御断まうすべきことなるに此みちのさかえだなどゝうれしがつて却てこの方より願だてしてむりにわれへおくり付たること不届至極なりわれなんぞこの事をよろこぶべきやわれ生前このみちにふけり主人の家を出て不忠不義の人となりしといまさらふかくなげき後悔千万にぞんずるところなれば何どぞ人も俳諧などせぬやうにしてすこしは世上の用にもたつべき道を［」16ウ］まなべかしとおもふところなりそのよろこばぬ道をもつて賞翫せらるゝこそ片腹いたきことなるかし其方どものやうにわが木像を刻床の間へすへおきなどするをわがよろこぶべきとの了間ならんがわれけつしてこれをよろこばず天下の人をひきひて文盲にする本尊よと具眼の人にみらるゝがくるしくまた此人も俳諧などしてやどなしになりはては人の家で死けるよなどおもはるもつらければ以後わが木像や画像なとの沙汰必無用たるべしかつわが忌日により合われて祖翁［」17オ］と唱ふることもかならず無用なりわれはなはだ俳諧の祖になることをはづかしくおもふなりと以の外の返答なりければ鳳朗はじめ満座の人々あきれはてたるばかりなり桃青の霊しばらくしてまた云やうなにも其方たちに俳諧をやめろと云ではなしどのやうなたわけも勝手次第につくすがよけれどたゞ吾を俳諧の祖師ととなふることをやめかつ花の下大明神の贈号を其方どもより御辞退まうし返上におよぶやう

にとりはからふべし此一事はひとへにたのむところなり坐上の人々も此旨心得たま［」17ウ］はるべし尚又碓嶺得蕪其外の俳諧師どもへもつたへ給はるべしとて蕉翁の霊はかの木像をたちさりけり

董太史塩河岸に盛儀を訪ふ

松本董斎董玄宰の筆法を自得し已に出藍のほまれたかく江戸むき一の名家なりとて自ら高尚にして居たりけるある日俳諧師よりたのまれたる摺もの板下などしたゝめたるがあまり細字の仮名にて精魂もつかれたるにやしばし筆をやすめて机によりこゝろともなく［」18オ］居寝けるに衣冠たゞしき人物あつて董斎々々と呼さますにぞはつとおどろき目をひらいてこれを見るに一向これまで見しらぬ人なりされども容貌たゞものとおもわれずしるこやの看板たのみに来たものとも見へざれば何さまあやまるにしかずと手をついて丁寧にあいさつしたる彼衣冠の人いふやう我は明の太史董其昌なるが汝が平生わが書風を学といつてあらぬ字をかきちらし医者俳諧師などを欺くことのつらにくさに［」18ウ］いさゝか書法をかたらんとてまいりたり一躰汝が師匠とたのみたる敬儀にかたりきかせんとおもひたるが先年米芾老人米庵をいましめらるゝとて妙々奇談にあるとをり敬儀が我書風を害するよしを序にいわれけるゆへ又あとのことゝおもひそれぎり容赦いたしおきしか程なく敬儀も死去いたしわが存念も空しくなりしがしかしわが書風を汚すものなくなりまづ一安心とおもひしところ近年汝が書おこなわれ董斎などゝことはり［」19オ］［図版③］［」19ウ］20オ］なしふわが姓を冒し其昌をまなび候とてわが筆意もしらず倨傲不遜いふばかりなし汝まづわが書をいかなる物とおもふぞや大躰法帖をみても少し文才ある者は結構體勢にても源流はしることなり我もと右軍を以て帰宿とし百家を陶鋳し万類に出入し心手自然に融化して心にまかせ手にまかせ筆を起し来り綽然として書をなすゆへを以て風雲飛動神気溢出し疎放なるがごとくにして疎密匀桶し位置［」20ウ］宜に適ことを得たり汝が敬儀の俗筆をもつて生涯の軌範とするの凡眼では此等の論はわかるまじけれども少しは筆を拈すこともわきまへたらんまづこゝろみに暦代の書家を見よ誰か右軍を師とせざらんしかれども流を分派をことにして門戸によらず超然融会し変じて一家をなす汝が敬儀をまなぶがごとく画々字々形容の似たらんことをもとむるが如きは書をまなぶものゝ法にあらずこれはこれ汝ひとりにもあらず近日書家と唱［」21オ］もの

図版③

比々みなこの病あり敬儀がわれをまなんで董堂と称しわが書に似せむとて意をきはめて模倣したれどもこれも無学にして書論をしらざるゆゑ死ぬまで書法をさとらずたゞわが飛白の字體のまねをして俗をおどさんと工みしゆゑ晩年骨格なきいやな書風になり俗にいふあらめを蒔ちらしたやうに首尾まつたからぬ支離滅裂の字を書たりしかるに書肆薬店などの看板をしたゝむるに至極俗人の目にかなふ［」21ウ］ゆゑ一時虚名をなして書苑の仲間入もしたるよしかゝる人物が我書法を自得せしとて董堂と名のることふかく我にくむところなるに汝また其門戸に出て其悪法をうけつぎ不相替支離滅裂の字をしたゝめ見解ます〳〵下り俳諧の板下をかき天ふらや汁粉やの看板までもしたゝめ候事申べきやうもなき下劣のいたり也昔章子厚日に一遇かならず蘭亭を臨書せしかば東坡先生これを哂つて門より入ものは終に家珍にあらす［」22オ］といはれたり王子敬名家の子なりといへども自立して阿翁の牛後とならざらんことを欲すみな古人をまなぶものは如此汝もよくわが書風をまなばんとおもはゞまづ敬儀がわが書風をまなびそこなひたることをしつてかのしんのある筆をもちごり〳〵音のするやうなかきざまをなすべからずいかに飛白をまねんとて唐紙のやぶれる程こすりつけることわきまへなきいたりなり髪結床の虫喰字とかいふ筆法ならんがこれはちやうちんやの永字八法よ［」22ウ］りもおとりたる

仕方なりくれ〴〵も眼のつけところをとりかへこれから少々学問でもして書論をよむやうにすべしかつ胸中の俗気を陶汰し風雅の道をこゝろがけ俳諧師などの文盲を友となすべからず謹で我教にそむくことなかれとてあくまでやりこめられるにぞ董斎おそれ入て平伏しなんとこたへんやうもなく穴へもいりたき風情にてさらに頭を擡えず董太史うちわらつてさて〳〵思のほかよはき男なりまた種々いひきかせ度ことも[illegible]あれども今の［」23オ］ぶんていわがいふことはわかるまじければ十年も経て学問でも仕し少々は書論のはしもよめるやうになつたらは其せつまた〳〵いひきかすべしさればといつて立さりつ忽ち形は見えすなりぬときに家婢茶をくみ来たり御にばなが出来ましたといふにおどろきさむればこれなん南柯の一夢なりける

才子必読　弘化奇話初篇巻之上終［」23ウ］

《下巻》

才子必読　弘化奇話初篇巻之下

谷文晁八丁堀に武清に遇ふ　何毛呉餡内著

一四

北武清さる諸侯方よりの召捉にしたがひ絵具箱を家来にもたせ早朝宅を出たるにおもひもよらず門前にて先師谷文晁に出合けるこれは〳〵久しぶりにて御目にかゝり候ものかな先年御遠行なされし後はめつたに御宅へも御尋申しあげす思召の程至極恐いり候とあい［」01オ］さつすれば文晁不平な顔色にて足下にいろ〳〵咄もあれば今朝わざ〳〵まいりしところなにか出がけの様子にて甚きのどくにぞんずなりしかしながらまたといふもめんどうなればこゝにて鳥渡御談まうすべし外のことでもござらぬが足下近年の画風大に俗劣になり多年御伝授いたせし画法などどこへやらとり失ひつまらぬ竹や布袋の様なものをしたゝめ狩野家の奴のまねをして探幽や常信のにせものをこしらえらるゝ事いかゞのこゝろえ［」01ウ］やらん昔沈啓南戴文進が画し桃源の図をうつすとて二日程筆をとりしが半にして筆をすてわれ此図をうつさんとしておもはず戴が悪臭気に染りたりとてなげきしことあり戴が画は沈がきらふところなりされども其図のよきにようつてうつしとらんと欲せしかども悪臭気に染らんとて業を終ず古人まなぶところをかへさることかくのごとし足下狩野家の布袋や山水のまねをするによつて近ごろ自己の画も狩野家に似たるところあり［」02オ］俗気俗風いはん方なし

必竟商賈を対手にして俗利にはしり金もうけをせんとの欲心より探幽などのにせものをこしらへつひに其風俗にいりいれられて固有の法をとりうしなひたりとおぼゆ一躰画工といふ者は書家よりみれば其品格やゝくだり筆を吸墨を和して工芸の蹊逕をのがるゝことあたはざるものなればよほどよくこゝろがけて雅致風韻を第一にせざれば人に見おとさるゝものなり足下の輩浮世画師をみくだして俗物とのゝしれど［」02ウ］も結構精密位置適均なることは却て国芳豊国等の歌川家の人々が能してそのみづから唐画家と名のる足下の輩はけつしてあたはず李思訓王摩詰等が山水をみよ精細毫芒に入て半絹の筆も草率造次の為ところにあらず王洽にいたつて初て溌墨といふものを用ひそれより項容枯硬を尚其後荊洽関仝がともがら大に画風を変じて平淡高遠の致をなせり李成范寛董源等のときに至るまで大都巧［」03オ］緻精密ならざるはなししかるに米元章王洽をまなんで出来ず倪元鎮枯筆を用ひて色沢なきをこのみしより画意精工を求ざるの論おこつて後来足下の輩にいたるまで拙を蔵し醜を掩ふのよりどころとなれり今の唐画と称する者の浮世画師におとること萬々なり足下また鑑定をよくするとて自らほこるわれこれを殊の外おかしく思ふなり画伝がひとつよめぬくらぬで画の鑑定もおしがつよい米芾の画史に［」03ウ］いふ馬をみれば曹韓韋とし牛を見れば韓滉とするがごとく足下の鑑定何の証拠かあらん模糊たる雲樹をみれば米元章とこゝろえ鷹隼鴻渤をみれば宣和とおもひ馬をみれば子昂とおもひ蘭をみれば雪窓とおもひ人物をみれば銭舜挙とおもふまでのことにて神韻骨格なにものするをしらずそれ画は工芸のみちなれども世運の舛降を知る大事のものなるが故衣服制度人物器用歴代の造制を悉しくしらざれば真［」04オ］の画師といふべからず勿論唐宋の画人は今の画人のやうに糊口のためにするでなければ鄙劣な了簡の人は一人もなしまた各匹夫無禄のものでなければ気格自然と上品にして文雅の風あまりありことさら一時才学の俊彦おほければ足下輩あきめくらの仕事と相違して衣冠制度宮室規模の考訂至極よく行届きたり足下の輩是等の事は無学なる故たとへわきまへても穿鑿することあたはず意にまかせ心を師とし凶莽滅［」04ウ］裂やゝもすれば写意といふにかこつけて近道をこしらゆれど田舎漢すらうけがはず鑑定をするにも画をかくにも歴代の史冊にあきらかならずして出来べきやうなしと長々しく談しかけるにぞ武清大にこまり入たん〳〵御教示の程至極御尤千万何を申もこゝは門前にて御返答もまうしかねるかつ大勢人立もつか

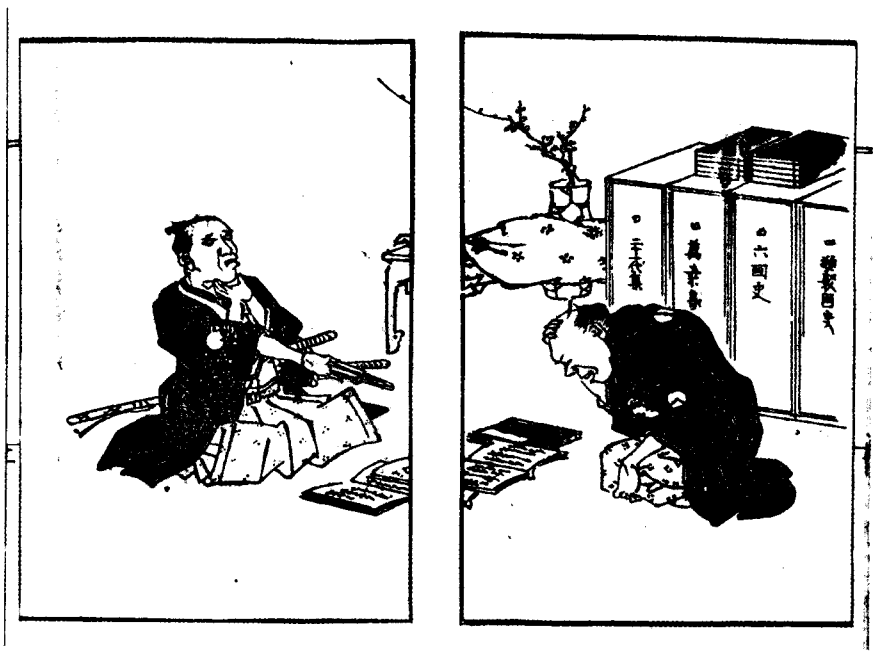
図版④

度とことは［」05オ］〔図版④〕［」05ウ」06オ］りをいふに文晁から〳〵と打笑失礼なる申分かな先輩のわれ〳〵にむかつて出掛ゆゑまた明日こいのなんのといはれた口上なるかわれ足下に画をたのみに来たるにあらず足下の画風鄙劣千万なるゆゑ先年中より我伝授せし画法をいづくへなげすてしやう承知いたし度わざ〳〵まいりしところなり序なれば種々唐宋の画論を申のぶる願ふてもなき幸ひなるべきにきこふとはせず人立がして外聞わろしとは何事ぞやとてもそういふ了簡では我いふ［」06ウ］ことはもちひまじきが以後のこらしめにもふすこしいひきかさん宅にては家内のものはかりではり合がないこの大勢人どをりのする中で恥をかゝせて遣すべしとあるに武清ます〳〵こまり入イヤ左様なわけではござらぬ尊公様にたいし何とて失礼を申いれんや御画論の程も寛々うけたまはり度候へどもこのところではめいわくともかくも宅へとひらにあやまるにとをりの人の内両三人武清を知たる者ありけるが一人がいふやう「武清さんはあの男に借でもある［」07オ］と見へてひどく閉口してゐるがきのとくなことた一人「なアによくきけば画が下手だといつて師匠さまにしかられるところた一人「しかられるはずだこのごろはすぶつまらぬことをかくものヲあれをしからねへじやア御まつればはなはだ外聞わろく存候何卒今日は出掛のことゆゑ御容赦下されまた明日にでも御尊来くだされ候様つかまつり

師匠さんも大ばかた

難語之考濱臣守部を嘲ける

弁天山の守部ちかごろ大人の中間いりしてちとのほせ気になりつまらぬ著述追々出来せしがある日故人になりし清水濱臣忽然と出きたり嘲て曰其許は方今「」07ウ」詞林の一名家と我等泉下にあつてうけたまはり後世おそるべきことかけながらたのもしくぞんせしにさて〳〵思の外なる愚陋の御人なりわれら多年辛苦して考おき候説など難語考を御著述にてみな御とりもちひなされ公然と上木して御自分の御説になされ候事至て御人躰に似あはざる仕方なり衆目の昭々たるかのじやうはりの鏡よりあきらかにて拙者の説をぬすまれたるといふこと今ではたれしらぬものもこさらぬよし「」08オ」苟も先生株の者右様の始末こそ愧べきの甚しきなりたとへわるくても不苦御自分御力にて御考なされ候御説を御上木の方がはるか人の説をぬすむよりはよろしきことゝ存候拙者の考候説を御ぬすみなされても拙者はなんともぞんぜずしかし衆評かしましく候へば拙者ひそかに御自分の為にはづかしく存候ゆゑ御忠告申なり一躰御自分は随分今の才子にて御歌も相応に出来るやうにぞんじらるゝがなんにしても人の説をぬすま「」08ウ」るゝが至て不見識のいたりなりといふに守部頂上の一針にて赤面しながら負おしみの男なればイヤそれはぞんじもよらず自分においては人さまの説をぬすみとり候ことなどけつしてこれなく難語考なども貴公様の御説と同考いたせしところもあるべく候が其程はぞんせず候へどもそれはあるにもいたせ世の中に暗合と申ことも候へば何も貴公様の御説をぬすみとり候などゝ申わけはけつしてこれなきこと也と返答するに濱臣ます〳〵嘲けり「」09オ」わらつてイヤ左様に手づよき御あいさつならば此方にもまだ種々御話がこれあり候しからば難語考の儀は拙者の説と暗合にもいたせ御統瓊の御説は本居翁古事記の伝に歴然とある説なればこれは暗合とは申されまじこれも暗合といはるゝならば御自分古事記の伝をしらぬ固陋の人といふべし古事記の伝を御存知なきやとつめかへるにイヤ承知いたしてまかりあるといふ濱臣わらつてそれならば全く御統の瓊の説は本居翁の説「」09ウ」なりこゝをもつてかんがふるにたとへさうでないにしろ難語考も半拙者の説のぬすみものと衆知いたさるゝまた御世話なされし下蔭集なども其撰の疎漏なるいまどきの狂歌師もとらざるいやしき調のものばかりなり此御手際でみれば御考の程もおもひやられてよい



図版⑤

御説のないはしれてあればいかにも人の説をぬすみもせられずは御著述も出来まじまだ拝見はいたさねどなにかうけたまはれば長歌撰格といふ御［」10オ］〔図版⑤〕［」10ウ］11オ］著述あるよしこれも世間の評判では西国の人某が作を其まゝ奪はれたとのことなり昔郭象向秀が荘子の註をぬすみ生涯汚名を負て死せりそのときには人もしらじとおもはれてもいつかあらはれずにおるものにあらず世にはづかしきことこれにすぎたることはあらじいまだ世間へ出ぬが幸なろうことなら長歌撰格も原本所持の人あるときけば御出梓なさらぬがよかろうとぞんずるいらざる御世話ながらおなじみくにの学問を［」11ウ］いたすゆへ見すてるも本意ならねば一片の老婆心を申のぶると言々句々返答の出来ぬことばかりなればさすがの守部も閉口し生娘ならねと塵を捻てたゞもぢ〳〵としらみきつて見へたりけり濱臣このありさまを見てきのどくにやおもひけんイヤ左ほどに恥らるゝにもおよばずたれも初心なうちは皆御自分のやうなものなりちとこれから学問いたさるゝがよし其内また〳〵御意得んとていづくともなくきへうせけり［」12オ］

先哲之話原念齋琴台を説く

東條琴台柳嶌銀坐の寮へ引こもり子息も成人したるゆゑ所々代講にあるかせ自身は先哲叢談の続編を上木せんためさ

まく〳〵工夫をこらしちかころ又さる諸侯方の御蔵梓になさるゝ明史の訓点をつけ居たるが先年死去せし原念斎来りて対面をもとむ琴台これは定めて先哲叢談の一件にてわが後編続編と著述するに付て其志をうけつぎたる礼［」12ウ］などいゝに来るならんと手まへぎはめにのみこんでこれは原氏にはようこそ御入来イヤハヤ拙者など年ころ鉛槧に骨を折候へども何ひとつ仕出したることもなく愧入たる仕合なりしかしながら御案内にもこれあらん其許御骨をられましたる先哲叢談も拙者追々嗣続仕候てすでに此度続編も出来仕候程の事御悦くだされ候様にとありければ念斎怫然たるおもゝちにてされば其事にて候倅徳斎無学にて某が箕簀をうけ［」13オ］つぐ事あたはず多年辛苦せし纂脩の業もそれぎりに相成なげかはしくとは申ながら已に大方編次も出来致せし上はなにも其方様の御力を借受候にはおよばずたとへ其方様別に閑散分宜史とやらの御著述あるにもせよ已に某先哲叢談の編述あれば諺にいふおくればせ尻馬にのる道理にて其方さまの御手柄とはまうされまじ利を射名を衒ふ汲々たるに後編の著述ありしがもと繰進のなすところなれば文章の手際ことに［」13ウ］みくるしく転倒錯置語をなさゞるところのみおほし文章は身後のもの一代の大業なり苟も仕てよきものにあらず先輩の人々へいくへにも相談あつてしかるべきことなるに書買をだまかし山師のごとき行をせられ遂に先輩に擯斥せられ鄙劣な了間を出して度々書画会の催ありあるひは扇面亭と同謀にて人名録をこさへ金百疋の入用を出せば非人でもかまはず録中へ加へのせられ田舎漢の嘲を受るにいたるこれ儒たるものゝ所業にあ［」14オ］らずしかしこれらは某が管ざるところなればたゞ御意見申のみなり此度御著述の続編はどこまでも某かゝり合なれば是非議論まうしのへざることを得ず古語に君子は人の美をなすといへり其方様も読書の人なれば人の美を奪はぬやうにいたさるゝがよいむかし仁齋の古義其子東涯の手に出来たれども発端仁齋にありければ仁齋の著述にして出せり父子の間なれども其ことかくのごとし況や其方様と某とは同じく儒業をいたす朋［」14ウ］友なり生前格別の御懇意はいたさねどまづしり合たる中なり義理をしつたる人ならば何とて某が美をおほふて自身の名にて後編は出されまじ倅徳齋微弱なれども先輩のさしづを受文章を相談いたせし上ならば箕簀のつげぬ事はあるまじことに編修出来も半某がいたしおきしことなれば格別骨の折たることもあるまじしかしこれも申せばまうすやうなものゝ御自身衒名射利のためにいたさ

るゝことを某が邪魔を申いれるやうにては御気のどくに［」15オ］ぞんずる定めて御心中にては其方の力を借るわけではなしいらざる世話をやくやつとおもはるゝでもあろうが某もいたしかけしこと半にして人にとらるゝも犬ぼね折てたかにとらるゝとやらであまりつまらなくぞんずる間此度御著述の書もやはり後編凡例に御ことはりなされしとをり閑散分宜史との標題にて御出板なされるやうに致たくぞんずる其方様も当世の一名家たゞいまでは御宅へこもかぶりの一ツもおたくはへなさるゝ程のわけにて大分御らくの御［」15ウ］やうすなればなにも人の糟粕を舐り金もうけせらるゝにもおよぶまじければ先哲叢談の株は某へ御かへしくだされ書名御とりかへくだされたしそれとも是非某があとを御つぎなされもとの書名にて御開梓なされたくば著述の名前は某が鄙名にてもあるひは倅が名にても御出しなされ其方様は校合人にでも御名前御出しなさるべしといふに琴台案に相違してこれは迷惑のことをうけたまはるものかな拙者壮年より刻苦いたせし［」16オ］〔図版⑥〕［」16ウ］17オ］業中々人の名前にて著述などゝはおもひもよらずと返答すればイヤ左様ならば御かつて次第のことそのかはり唯今申入しとをり先哲叢談の書名は此方へ御かへしなさるべし此義は是非とも左様いたさねば某泉下にあつて煩脳の種なり修羅道に堕落いたすことになるまじきにもあらずそれにては甚迷わくいたすことゆへ

図版⑥

難題ながら両様のうち御返答うけ給りたしと詰かへるにそ琴台あたまをかくばかりそれは「サア其儀は「サア「サア〳〵「」17ウ」と芝居のもんどふみるやうにこまりきつたる風情なり

地獄之奇談

弘化二年のことなりし栄久か主人身まかりて冥途の旅に趣けるがあちらにてはからずも京　伝種彦一九春　水三馬などの諸大人に出会けるまづひさしぶりのことなれば互に積る物語せしが栄久主人いふやうさてこのせつはしやばもまことに戯作者の種ぎれにて先生方御引とりの後はなにひとつ本らしきものは出来申さずたま〳〵出来れば「」18オ」熱病人のうはことをいふやうな前後乱脈のわからぬことばかりつゞくりそのうへ作料ばかりほしがり候ゆゑ書肆も一統こまりきつてそれにつけても先生方御在世のことばかり御噂まうし居ることとのものがたりに京　伝三馬の諸人大にわらつてこれはいかにも左もあらんそのことにてわれ〳〵もきのどくにぞんずる一躰われ〳〵が仲間にて至極下手な作者に鬼丈といふものありしがそこもともしりつらんこの男あまりに戯作が下手でそのくせ銭ばかり欲がりしゆゑ「」18ウ」冥府にて閻王大に立腹あり数年餓鬼どうにまごつかせおかれしがわれ〳〵度々訴訟してこの間中責らるゝ苦をまぬがれさせておきたりしかるに当時戯作者種ぎれにて今作者になればよい時節なりとて無下に文盲な輩できもせぬくせに筆を弄し頻に思案をこらせどももと腹にないことは出来やう道理なければ今の十返舎一九柳下亭種員万亭応賀松亭金水二代目春　水画工英泉など毎朝われ〳〵が霊をまつりて何卒戯「」19オ」作上達いたすやうにとていのるほどにわれ〳〵もうるさくおもひ此間中より鬼丈をほやうにつかわし彼ともがらの形骸へいれおきたりかの輩六人ともに鬼丈の魂とりつきいたれば定めて種々のうはことをならべたて嘸かし世上のものわらひならんとて毎日うはさをいひくらせりとあるに栄久主人はじめてことのもとをしりさては左様にて候かいかにもうはことのやうなつまらぬものばかり出来いたし候根本を承り初めて疑心氷解いたしたり「」19ウ」しかしうはことながらまだしもそのやうなものゝ魂とりつきをればこそ作も出来候ことゝおぼへたり左もなくて中々あの衆に戯作どころか田作も出来るはずがないといふにかの諸人さりながら書肆がこまるであろふ接魂鬼をつかはして鬼丈が魂をとりかへすやうにい

たすべしとあるに栄久主人これをとゞめてそれは御無用になさるべし唯今もまうすとをりあの衆に作ができるといふはまつたく鬼丈の魂とりつきおれば［」20オ］ならんもし御よびもどしなさるれば誰一人作の出来る者なく書肆ども却てこまりきりまうすべしうはことながらもまだしも作が出来るこそめつけものにて候へばまづ名人のできるまでそのまゝにいたしおかるゝがよろしかるべきといふにかの諸人大にわらつて栄久主人のいふところまた一理ありさりながらわれ〳〵の作をせんたくして自分どもがあたらしく仕立しやうにほこる族もあれば一まづかれらをよびよせて［」20ウ］一統にいひきかせんとおもふなり此儀はいかゝあるべきととふにかたはらにしやうつかの婆ゐたりけるがそれは至極よろしからんわれら此せつ罪人の衣類せんたくにいとまなくこまりきつてあるなればその輩ふるものゝ洗濯上手とうけ給はれば何とぞおよびなされせんたくの手助いたしてもらひたしといふにかの諸人なる程そのことにはわれ〳〵より器用ならん早速よびよせべきなれば古ものゝあらひはり御手助に［」21オ］なさるべしとあるに栄久主人イヤ〳〵それも御無用〳〵かの人達はせんたくの上手なるのではなし古ものを其まゝとり用ゆるが得手なれば折角はる〳〵御よびなされても何の御用にもたちますまいといふ彼諸人も婆も大にうちわらふて終によびよせることはやみけるとぞ

二二

才子必読　弘化奇話初篇巻之下終［」21ウ］